

ふるさとわかまちづくり

下古屋自治区

「四郷」と「下古屋」の由来

四郷について

15世紀後半、田初郷、富田郷、大島郷、深見郷の四つの郷に亘るところから「四郷」と言われたという説があります。

書物による公式の記録では、室町時代の貞和(じょうわ)5年(1349年)の猿投神社の「修理米注進状」に「四郷」と書いてあり文書での記録としては、最古の文献です。今から約650年以上前から四郷があったという証であります。

「修理米注進状」: 神殿などの修理のため、お米を出してほしいという猿投神社からの書状

下古屋について

慶長5年(1600年)関ヶ原の戦いが終わり、江戸幕府が開かれ、各武将達を全国に配置し近世の封建社会が確立しました。四郷村は、初代伊保藩主、丹羽勘助氏継次の領地に含まれました。当時伊保藩は、全部で22ヶ村でした。

勘助氏継次の息子、氏信が領地を継いだか、その氏信もすぐに寛永15年(1638年)、岩村城へ国替えとなり、丹羽家の支配は38年間で終わりました。

四郷村は、次に幕府直轄領(四代将軍家綱の時代)となり代官鳥山牛之助精明が統治することになりました。

そして四郷村に代官の陣屋が置かれ、その陣屋(代官の役宅)の周りに代官に仕える色々な職業の人達の家ができ、次第に集落を形成しました。それが陣屋下の小屋「下の小屋」が「下古屋」と言われたのが地名の始まりではないかと言われ、「下古屋」は、歴史と文化と伝統のある「まち」です。



まちづくり活動への期待

お鍬山の歴史

愛知環状鉄道四郷駅のプラットフォームから西の方を眺めると、籠川の堤防の上にこんもりとした丘が見えます。これがお鍬山です。明治5年に四郷村作成の神社堂地絵図面書上扣によれば、お鍬山は鍬大神社が祀ってありました。このことから、お鍬山は下古屋集落のものということがうかがわれます。

また、お鍬山は別名「弘法山」とも呼ばれ、その由来は明治の後半に、当時の山地主達を中心に、この山に八十八体の石仏の弘法さんが奉納されました。大正15年頃になると旧暦3月21日の弘法さんの命日には、多くの参拝者があり大変な賑わいで、山の麓の境内では、子供相撲、芝居、宝探しなどの催しや甘酒などがふるまわれたりして、弘法さん所有の家族や近郷近在の人達で随分賑わったそうです。

その後、山の所有者が外部の者に変わった事を契機に、下古屋の石仏、弘法さんは、延命寺の境内に祀られ、旧暦3月21日の弘法さんの命日には、お参りの人々で賑わっています。それからのお鍬山は荒れ放題となりました。

お鍬山での里山整備活動

お鍬山の所有が豊田市に移り、平成13年より下古屋自治区の「まちづくり委員会」が里山整備(一部豊田市の公園事業応援、県立猿投農林高



お鍬山からの風景

校の雨宮先生の指導)による間伐・下草刈り・広場や遊歩道の整備・椎茸菌打ち・カブトムシの産卵場作り、各種のイベントなどを通じて区民のふれあいの場として地元企業や農林高生も一緒になってのまちづくりを進めています。

地域の変貌

お鍬山からの眺望は良く、猿投山、恵那山も望まれ、冬の晴れた日には真っ白に雪をまとった御岳山など日本アルプスの山々が望めます。眼下には、平成19年1月開業の救命救急センター機能を備えた豊田厚生病院の完成に併せて、籠川に架かる市道四郷西山線の西山橋の橋梁改良工事が行われました。

さらに右手に見える花本工業団地では、トヨタ自動車(株)による新オフィスビル・電波実験棟・立体駐車棟などの建設が進められています。そのまま眼を左に転ずれば、下古屋自治区の家々や、愛環四郷駅、国道419号線の車の渋滞状況なども身近に感じられます。

自然と親しんだまちづくり

これからも、焦らず、「ぼち・ぼち」とみんなが一緒になって、自然に親しみながら「まちづくり」を進めていきたいと思っております。

下古屋自治区データ

(H19.4 現在)

設立: 明治10年
世帯数: 415世帯
(357世帯 S51年度)
組数: 23組
面積: 1.24 Km²
自治区たより: 「したごやたより」年4回発行
回覧: 月2回
ちびっ子広場: 1箇所
ふれあい広場: 1箇所
防犯灯設置箇所: 38箇所
小学校: 四郷小学校区
自治区会館: 下古屋公民館 (45-4027)

豊かなふれあい、めくもりある、あかるいまちづくり